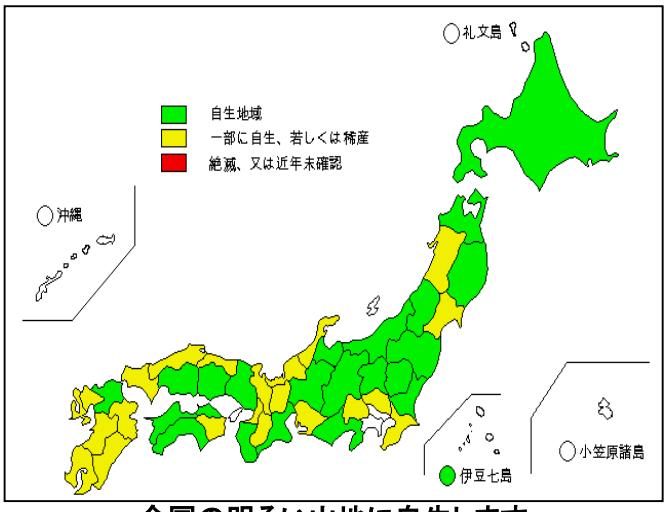
#149

ジガバチソウ

Liparis krameri

ジガバチソウ(愛知県西三河09.05/23)

全国の比較的明るい山地に自生するランです。日本にも多くの種類が自生しているリパリス属の中でも特に花の形が複雑で、似我蜂に例えられてこの名がつきました。草姿は花茎の先まで入れても20cmほどで、中部地方平野部では5月初旬～6月中旬にかけて下から順番に複数輪の花を咲かせます。花色は濃茶色から純緑色までバリエーションがあります。登山道脇やコナラやクヌギなどの落葉樹林下、または赤松の生える斜面など比較的明るい場所を好みます。薄暗い杉林にも自生は見られますが、やはり林道沿いなどの開けた場所を好みます。落葉性の地生リパリス属は本種のほかにクモキリソウ、スズムシソウ、セイタスズムシ、ギボウシラン、ササバランなどがありますが、特に本種とクモキリソウ、スズムシソウ、セイタカスズムシは草姿が非常に良く似ています。一番多く見られるのがクモキリソウで、その次がジガバチソウでしょうか。スズムシソウはより観賞価値も高く盗掘も多いため一番少ないようです。ジガバチソウは葉に縦だけでなく横にも網目状の葉脈が見えることから判断できます。



全国の明るい山地に自生します。

ジガバチソウ(愛知県西三河09.05/23)

人里近くの低山帯に多く見られ、かつ山道などの開けた場所を好むことから盗掘の被害はあとを絶ちません。葉のシーズンはスズムシソウと間違えて盗掘されるケースも多いです。ラン科の中でも渋く日本人好みで観賞価値は高いほうですが、地味なランでもラン科というだけで売れると考え大量盗掘されているのが現状です。また、里山の開発による宅地化、雑木林の減少も自生地の激減に大きな影響を与えています。 本種は株繁殖はほとんどしないため、大抵は数株単位で点在しています。その点では、心無い人間に見つかって盗掘されても実生で繁殖している以上数株はまず残るので、一回の盗掘で即絶滅ということはありません。しかし、個体数が減るとその分結実率、散布される種子数も減るので今ある自生地を山単位で保全することが絶滅を回避する最良の方法と思われます。

Document and photo by LittleFlower 2009

商用生産はされていないため入手は困難です。野草店やドライブインなどではしばしば見かけますが、全て盗掘の持ち込み品と思われます。但し、個人単位で無菌培養をされている趣味家の方も見えます。栽培自体はさほど難しくはありません。コクランやスズムシソウなど他の地生リパリス属に準じます。但し、コクランやクモキリソウに比べるとやや乾燥と日照を好むようです。ミズゴケの山植え、又は生きた山ゴケなどに直接植え込んで管理するのが潅水の目安にもなるのでようでしょう。 増殖はあまり期待できませんが、環境があっていればバルブの脇から芽がでて株繁殖もします。また結実率も良いため、親株根元に撒いておいても実生苗が期待できます。大量に増やす場合には無菌培養法も有効です。

ジガバチソウ(愛知県西三河09.05/23)

ジガバチソウ(愛知県西三河09.05/23)

近縁種にはクモキリソウ、ジガバチソウ、スズムシソウ、ギボウシラン、ササバランなどがあり、どれも良く似ています。半着生種のフガクスズムシ、クモイジガバチ、着生種のチケイランやキノエササラン、コゴメキノエランなども同じリパリス属です。リパリス属は大変種類が多いため、ここで全てを紹介することは割愛させていただきます。葉姿はどれもにておりますが、ジガバチソウはこれらの中では小さいほうで、花が特徴的なため判別できます。また、ジガバチソウは花色のバリエーションが多く、花色によってその固体を「アオジガ」、「アカジガ」、「クロジガ」と区別して呼ばれることもあります。また、ヒメジガバチソウと呼ばれる種類もありますが、本種との明確な違いは不明です。

ジガバチソウの葉(愛知県奥三河09.07/05)

【参考】クモキリソウの葉(愛知県奥三河09.07/11)

Document and photo by LittleFlower 2009